

日本イギリス哲学会 九州部会 第29回研究会例会のお知らせ

日時： 2010年12月10日（金曜日）、午後4時～午後6時

会場： 九州大学箱崎キャンパス 法学部棟2F大会議室

報告者： 関口正司（九州大学）

テーマ： バーナード・クリックの政治哲学とシティズンシップ教育論

【報告要旨】

バーナード・クリックの政治哲学とシティズンシップ教育論

関口正司（九州大学）

報告者は現在、イギリスの政治哲学者であるバーナード・クリック（1929-2008）の著書 *Essays on Citizenship* の翻訳作業を、共訳者・監訳者として進めている（邦訳仮題『シティズンシップ教育と政治哲学』）。訳書は2011年3月の公刊を予定しており、現在、最終の校訂段階にある。この翻訳に取り組むにあたって、報告者は、クリックの諸著作をあらためて読み直し、彼の政治哲学とシティズンシップ教育論の関連を考察する機会を得た。

政府はそれ自体としては民主的たりえず、民主的に統制できるのみである、というクリックの言葉に典型的に示されるように、彼の政治哲学は通常の民主主義理解の弱点を衝く視点をそなえている。その視点は、クリックが「市民的共和主義」の伝統と呼ぶものと深く関連している。ただし、この伝統は、必ずしも現代の共和主義的言説で十分に活かされてないように思われる。たとえば、現代のこの種の言説には、政府はそれ自体では民主的たりえない、といった「統治・政府」の鋭い本質理解は見られないのではないか。ただし、クリックのこうした理解も、ヨーロッパの古典的政治学の伝統に根ざしたものである。アリストテレスに始まるこの古典的政治学の伝統は、「市民的共和主義」の伝統とも重なり合っているが、20世紀に入って、デモクラシーが唯一正当化可能な政体であるという見方が広まる中で衰退していった。クリックの政治哲学とシティズンシップ教育論は、古典的政治学では常識的であったものを、デモクラシーと市民形成という問題の文脈で、再度、掘り起こしているのである。

クリックのシティズンシップ教育論は、このように、伝統に根ざした深い政治哲学的洞察を基盤としている。本報告では、彼のシティズンシップ教育論そのものもさることながら、この政治哲学的基盤に注目しつつ、この基盤と彼のシティズンシップ教育論との関連を明らかにしたい。